

高齢者大学文芸部

9月歌会

八月の北斗の星を仰ぎをりシベリアの土に眠る夫はも 氏岡百枝
友人に助けられつつ此のたびの投票終えて心なごめり 荒木 幸
小雨降り木立のもとに佇めばほつりと落ち来葉末の雫 宮本サチ子
盆はゆき安堵と疲れと寂しさの交々残りまたわれひとり 梅野カオル
言葉にて語り合ふこと適はざる夫の立ち日に経を誦むのみ 川口敦子
色褪せし紫陽花の花雨に濡れこの世の何処にもあなたは居ない 中川愛子
盲ひたる夫の研ぎにし鎌ひかりさくさくと刈る伸びし畔草 中原光子
刈る人の逝きて荒れ増す休耕田夕陽に舞ふ精霊蜻蛉 中津ツユ
くねくねと曲がる山路を登り来ていのちを守る岩清水汲む 山城雅子
老ゆくも人生生涯学習とわれを励まし今日も短歌詠む 今坂文子

万句の里俳句会

7月句会

急逝の妹偲ぶ星月夜 宮本雅子
はぐれ鳥夕焼空にのまれゆく 林まつ子
浜木綿の久しき雨に凜と立ち 富田幸子
日盛にきて名水に蘇つ 松永久子
寝返りの二転三転秋暑し 中路郁子
しなやかに風捌きゆく青田かな 鋤本トミ
薄紅葉くぐりて朝の露天の湯 田中ひさ子
風軽くほゝに触れゆく今朝の秋 東 鈴子
それぞれの楽しきプラン夏休み 稲田玲子
山の田の水は豊かに稲の花 梅田昭子
川音の軽くなりゆく今朝の秋 光本とよいち
正調の調べは涼し子守唄 岩本敬治

肥後狂句桜会

例会入選句集より

たつぷりと 米は里からもうけん 藤野清子
難しき 躰に手焼く反抗期 須藤新生
難しき 孫にや口出しせんがええ 田中孝幸
一周忌 いくら包むとよからうか 田尻浩風
談合して 建てた官舎の良過ぎとる 田中レイ子
談合して 潤おわすとは上ばかり 上村〇子

泗水短歌会

8月詠草

朝から暑い暑いと蝉の鳴く青田喜び稲の躍れる 宮本峯子
久しぶり開く歌誌よりほとり落つ忘れてるたる押し花菜 大島さと
世の不況吹き飛ばすがにばんぱんと揚がる花火に拍手歓声 増田久美子
大輪の花を咲かせむ炎天に若き花火師いとまもあらず 吉安永子
病みて伏す病院ベッドにほのぼのと母の匂ひを頭たす看護師 福原美智子
急がんと畦草踏めばカルカヤの露は着物の裾ぬらしたり 矢野悦子
戦争の悲惨を静かに老語る生き来しことの辛さ滲ます 高藤タツノ

せせらぎ俳句会

8月例会

今年また三回目の盆迎う呼べど呼べども遺影は黙す 長尾はるみ
夏空に一つ湧き立つ白雲に忘れられざる遠き日の頭つ 中山定子

朝顔の柿の梢を捕らえけり 村山数恵
火花火の消えたる闇の匂ひかな 服部静子
ひごたいや五岳はるかに連なりて 内村泊虹
百日草のひといろとなり咲き続く 藤本邦浩
天草の晩夏の夕日惜しみけり 五丁義昭
ホタルの墓のアニメに懐し終戦忌 藤本アツ子

青畳蘭草の香り欲しいまま 寺本和子
真夏日と言えるくらいに残暑かな (高一) 渡辺一史
くつきりとあの夏雲は何だろう (高一) 渡辺大寿

肥後狂句水笑会

8月例会

まだだろか 主役が来んと吞まれんが 井手水光

七城短歌会

8月詠草

抜く草に蜂の巣あるとは知らずして難免がれず酷く刺されり 水田紗陽子
向日葵の花咲く畑にポーズする幼児二人もひまわりの花 吉間充子
戸を開くる梅雨明けの朝鳴く蟬の活気をもたらす合唱かしまし 齊藤芳子
詩を吟じ終えて深々お辞儀する時なる拍手に我励まさる 高木 精

旭志文芸俳句会

8月詠草

夕星や七夕近き雨あがる 芹川蓉子
草刈りの夫背負い来し子蟻螂 中尾ヨシコ
故郷が終の住み処や赤とんぼ 芹川のり子
大樟の風生むごとくゆるぎけり 水谷ミネ
木漏れ月漸く出でし宵涼し 東 芳子

